

～11月14日は「世界糖尿病デー」～ インスリン治療を50年以上継続している糖尿病患者さんを顕彰する 第12回「リリー インスリン 50年賞」11名を表彰

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、社長:パトリック ジョンソン、以下、日本イーライリリー)は、インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病患者さんに敬意を表し、顕彰する第12回「リリー インスリン 50年賞」の授賞式を行い、本年は男性3名、女性8名の合計11名の方を表彰いたしました。

11月4日に行われた表彰式には、受賞者全11名のうち8名にご参加いただきました。50年以上にわたる道のりを振り返りながら、家族や主治医など周囲の方々からの多大なるサポートへの感謝や他の糖尿病患者さんへの励ましなどを力強くお話されました。受賞者の皆様には、ご本人のお名前を刻印した特製メダル(純銀製)と、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラが贈られました。

ご臨席頂いた日本糖尿病学会理事で永寿総合病院糖尿病臨床研究センター長の渥美義仁先生から、「糖尿病治療に携わってきた立場として、今日ここにいらっしゃる患者さんがインスリン治療開始後50年を迎えられたことを心よりうれしく思います」とご挨拶をいただきました。日本糖尿病協会理事で東京女子医科大学糖尿病センターセンター長の内潟安子先生は、「インスリン治療を始めてから50年間糖尿病とともに歩んでこられた方々に深い敬意を表します。皆様の50年の歴史を伺いまして、医療の力というよりも皆様の真摯な努力と、ご家族の支えが大きな力となっていることをあらためて感じ入りました」と述べられました。

日本イーライリリーは、今後も治療薬の提供だけでなく、「リリー インスリン 50年賞」や情報提供等の活動を通して、糖尿病と日々戦う患者さんに寄り添い、糖尿病治療におけるベストパートナーを目指してまいります。



※報道関係者様への情報公開をご了承いただいた受賞者様の記念写真

「リリー インスリン 50 年賞」とは

インスリン治療を 50 年以上継続されている糖尿病患者さんの長年のご努力をたたえることを目的に、1974 年に米国で始まりました。これまでに米国を中心に世界で 1,500 名以上の患者さんが受賞されており、日本でも 2003 年の表彰開始以来、第 12 回を迎えた本年度までで 77 名の患者さんが同賞を受賞されています。

毎年、表彰式は世界糖尿病デー(11 月 14 日)を前に開催しており、受賞者の皆様には、ご本人のお名前を刻印した特製メダル(純銀製)と、世界糖尿病デーのシンボルカラーである青いバラを贈呈しています。

日本イーライリリーは、「リリー インスリン 50 年賞」を受賞された患者さん方が、インスリン治療を継続する全ての糖尿病患者さんに勇気と希望を与え、治療に前向きに取り組む上での目標となることを願っています。



第 12 回「リリー インスリン 50 年賞」受賞者プロフィール

※50 音順になっております。

※池山様、小池様、鈴木様、前畑様、山田様には授賞式にご参加いただきました。

※報道関係者様への情報公開をご了承いただいた患者様のみご紹介しています。

◆ 池山 礼子 様 (宮崎県在住 / 57 歳 / インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病)

8 歳で発症しました。最初はよく食べるのに痩せていく、多尿もおかしいと親が心配して病院へ行き、「若年性糖尿病ではないか」と宣告をされました。子供が糖尿病になることは珍しく認知もされていない時代でした。小学 6 年生の時に小児糖尿病サマーキャンプに参加し、病気と向かい合うことを知りました。21 歳で左目が見えなくなり 24 歳には病院の寝たきり生活、26 歳で右目が見えなくなりましたが、24 歳の時に知り合った主人の顔は 1 年間ほどですが見ることができました。透析を始めた頃、主治医の先生に 3 年から 5 年ぐらいしか生きられないと言われましたが、30 年以上うまくつきあっています。友達やドクター等周りの人たちに恵まれてここまでこられました。奇跡はあります！

糖尿病となって「自分を知る」ことを学びました。自分を知って、病気を学び、理解をし、そして自分に合った治療方法を先生と話し合うことが非常に大事だと感じています。



◆ 内田 博子 様（京都府在住/ 82 歳/ インスリン治療歴 53 年/ 1 型糖尿病）

29 歳の時に糖尿病と診断されました。診断と同時に余命年と告げられ、それならば人に喜ばれるように生きようと思いました。合併症など数々の壁にぶつかりつつもボランティア活動などに積極的に取り組んできました。結婚後は東京から京都へ移り住み、主人が営む着物の染色工場をサポートの日々で、体が動けなくなって入院した時も帳簿を持ち込み、先生にたしなめられたこともありました。今では医療も進歩し生活しやすくなりましたが、当時はこんなに長生きできるとは全く思っていませんでした。苦労を共に過ごした主人や周りの方々の精神的な支え、励ましがあったからこそです。



1 型糖尿病の克服は、毎日の食と生活をいかに規則正しく真正面から取り組むかということ。先生方のご指導、看護師さん、周囲の支援をいただくことが必要だと考えています。

◆ 小池 武志 様（千葉県在住/ 79 歳/ インスリン治療歴 50 年/ 1 型糖尿病）

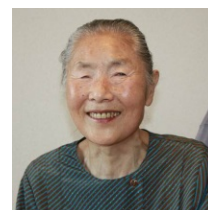
20 歳からインスリン治療を続けています。親父やお袋より先に死ぬような親不孝はしたくない、子どもたちが一人前になるまでは頑張ろう。そんな固い決意のもと歩んできました。29 歳の頃、長男が生まれ、その後自ら会社を設立し仕事一筋の日々でした。入院しながら仕事をするという苦難もありました。時間ができると子供たちとのスキーを楽しみ、次男のリトルリーグの監督を務めるなど、家族との時間も大切にしてきました。60 代ころから低血糖症状が多くなり、倒れたり、時には意識がないまま暴れることもありました。私の体調管理から仕事に家事に子育てと、妻なしには今の自分はありません。



治療 50 年目にして自分に合ったインスリンの組み合わせが見えてきたのも、常に優しくアドバイスしてくださる主治医の先生の糖尿病治療に対する熱意のおかげと思います。しかしながら自分がコントロールする気持ちがないと、いくら、名医と出会ったとしても良くなりません。本人の治そうというその気持ちが一番だと思います。

◆ 近藤 しま 様（千葉県在住/ 77 歳/ インスリン治療歴 54 年/ 1 型糖尿病）

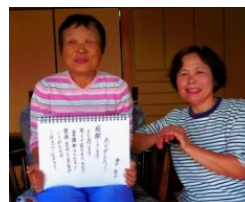
18 歳のころに手足が動かなくなり、入院生活、手術の日々が始まりました。どんどん痩せて、神経にも異常が出て、目の病気が出て、その当時何万人に一人の病気と告げられたのが 22 歳の頃です。ようやく糖尿病と診断をされました。23 歳で失明し、母の支援を受けながら独学で点字を習得してマッサージ学校を卒業し、マッサージ師として日々邁進してきました。原動力は周りに迷惑をかけず生きたいと思う意地です。何事にもトライしたいと思う、チャレンジ精神があったからこそです。



なるべく体を動かすことを心がけています。以前は仕事をして、運動をして、夫と朝晩散歩をしていた頃もありました。今は、朝掃除をして、ラジオ体操をして、一日おきに施設の周りをヘルパーさんと散歩する日々です。

◆ 鈴木 啓子 様（宮崎県在住/ 63 歳/ インスリン治療歴 50 年/ 1 型糖尿病）

26 歳の時に失明し、ショックを受けて家族も心配するほどの落ち込みようでした。1 年後、どうしても新聞を読みたいという思いから、点字の機器を購入し独学で習得しました。食事のコントロールを徹底的に学び自分で料理をするなどできることをひとつひとつ実現してきました。今年の 4 月、妹と台湾旅行を実現しました。治療を続ければ海外旅行にも行けることを皆さんに知っていただきたいと思います。楽しいことを見つけては実践し「今を生きる」。チャレンジ精神を大きな支えとしていきます。



自分自身の病気だから、先生に頼るだけでなく自分の体を知って、自分でコントロールすることが大切だと思います。

◆ 前畑 リツ子 様（宮崎県在住/ 82 歳/ インスリン治療歴 50 年/ 1 型糖尿病）

32 歳の時に発症しました。夫や母、家族全員のサポートのもと、治療に専念し、数年後には次男も出産しました。二人の息子が何事もなく成長したことが何よりの喜びです。大きな合併症もなくここまでこれたのは病気だと考えこんで特別扱いをしない事だと思います。趣味は旅行で主人と全国あちこちを回りました。パッチワークやカラオケ教室、老人ホームへコーラスの慰問も行っています。楽しい事をして笑顔いっぱいの生活をしています。何より 4 人の孫の成長を見守ることがこれからの励みです。



自己管理はもちろんのこと、医療の進歩の恩恵も受けて、長生きするのだという思いを持つことです。たとえば、「子どもが大きくなるまでは頑張ろう」など目標を持つこと、生きがいを感じる大切なのではないでしょうか。

◆ 山田 タエ子 様（千葉県在住/ 90 歳/ インスリン治療歴 50 年/ 1 型糖尿病）

40 歳から 90 歳までは注射で生かしてもらったようなものです。いい先生に巡り合い、手厚い家族のサポートに日々喜びを感じています。以前低血糖を起こし、動けなくなったり、無意識に玄関の外まで出てしまったこともありましたが、必ずそばに家族がいてくれたので助かりました。一人だったらと思うと怖いです。家族とともに 50 年を乗り越えてきました。80 歳で心臓のバイパス手術をしました。不安でしたが主治医の「98%大丈夫」という先生を信じ、手術を決心しました。無事成功し今でも元気に過ごしています。今年卒寿を迎え、家族にしゃぶしゃぶで祝ってもらいました。私は幸せものです。



世界糖尿病デーとは

拡大を続ける糖尿病の脅威を踏まえ、2006年12月20日、国連は国連総会で、国際糖尿病連合(IDF)が要請してきた「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を加盟192カ国の全会一致で可決しました。同時に、従来、IDFならびに世界保健機関(WHO)が定めていた11月14日を「世界糖尿病デー」として指定しました。IDFは決議に先駆け、「Unite for Diabetes”(糖尿病との闘いのため団結せよ)というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用。全世界での糖尿病抑制に向けたキャンペーンを推進しています。

(出典: World Diabetes Day Committee in Japan http://www.wddj.jp/01_howto.htm)

イーライリリー・アンド・カンパニーの糖尿病事業について

イーライリリー・アンド・カンパニーは1923年に世界で初めてインスリン製剤を開発して以来、糖尿病ケアの分野において常に世界をリードしてきました。現在も、糖尿病患者さんやケアを行う人々の様々なニーズに応えることで、この伝統を築いています。研究開発や事業提携、拡大し続ける幅広い医薬品ポートフォリオ、そして、医薬品からサポートプログラムをはじめとする実質的なソリューションを提供し続けることを通じて、世界中の糖尿病患者さんの生活の改善に努めます。詳細は以下のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.lillydiabetes.com>

日本イーライリリーについて

日本イーライリリーは、イーライリリー・アンド・カンパニーの子会社で、人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう革新的な医薬品の輸入・開発・製造・販売を通じて日本の医療に貢献しています。統合失調症、うつ、双極性障害、注意欠陥・多動性障害(AD/HD)、がん(非小細胞肺癌、膵がん、胆道がん、悪性胸膜中皮腫、尿路上皮がん、乳がん、卵巣がん、悪性リンパ腫)、糖尿病、成長障害、骨粗鬆症などの、治療薬を提供しています。また、アルツハイマー型認知症、関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、乾癬、高コレステロール血症などの診断薬・治療薬の開発を行っています。詳細はホームページをご覧ください。

<https://www.lilly.co.jp/>